

## もう二度と、悲劇を起こさないために

那覇市立那覇中学校一年 羽地 瑛麻

広島から沖縄に引っこして来て一ヶ月がたちました。沖縄に初めて来た日、抜けるように青い空、きらきらと光る海を見て、なんて美しい島なんだろうと感動を覚えました。七十六年前、ここで凄惨な光景が繰り広げられていたなんて信じられません。

私がいた広島では、一九四五年八月六日、原子力爆弾が投下されました。毎年八月六日になると黙とうをささげ、平和を願う式典も行われず。広島では原爆資料館にいったことがあります。そこには熱で溶けた建造物の一部の展示や当時の被害状況をとった写真などがありました。印象に残ったのが、幼い男の子が死んでしまった弟を背負い、火葬してもらいのを待っている写真です。男の子の目はまっすぐに前をみすえており、悲しみもさびしさも消えています。私はそれらを見てとても悲しくなりました。核兵器は一瞬で人々からすべてをうばってしまいます。地球にあってはいけないものだと感じました。同時に、戦争のおそろしさがひしひしと伝わってきて、今の平和がどれだけ大切なものなのかも感じました。

それからしばらく経ち、先日私は沖縄の平和資料館に行きました。そこで私は、

「戦争は、人間を人間でなくしてしまうんだ。」

と思い衝撃を受けました。広島原爆資料館では、核爆弾が落とされたことで傷ついた人々についての展示が多かったのですが、沖縄の資料館では人間が人間を直接殺すということが多く語られていて、広島のとくとは少し違うおそろしさを感じました。米軍だけでなく日本兵が日本人の赤ちゃんがうるさいからと殺したり、わずかな食べ物を横取りしたりしていたことも語られていて、心の底からぞっとしました。戦争は、人間を変えてしまうのです。

資料館には、人々が避難している「がま」の再現もありました。ごうごうと音が聞こえ私はおそろしくてすぐ出てしまいました。しかし当時

は外に出ることも、音からにげることもできず、ただ息をひそめてじっとかかれるしかなかったのです。怖い、おそろしい、という言葉ではおさまられないくらいに不安だったと思います。

また印象に残っているエピソードが、米軍兵も沖縄戦で戦ったことで多くの人が精神を病んでしまったということです。戦争は敵味方関係なくたくさんのものを失い、傷つけ、それでいて得るものは何もないのです。この戦争で幸せになった人など一人もいないのではないかと感じました。

資料館を出ると、平和の礎がありました。そこには沖縄戦で亡くなった人々の名前がたくさん刻まれました。風に吹かれた木の葉が触れ合い、カサカサと心地よい音をたてていて、とてもおだやかな空気の中に、ずらりと並んだ礎を見て、何とも言えない切なさがかみ上げてきました。国籍も敵・見方も関係なく、静かに並んだ名前を見て、もう二度とあんな悲しいことが起きないでほしいと強く感じました。

資料館に展示してある資料は、これでも戦争のほんの一部分にすぎないので。私には想像もできないくらい現実には、もっと残酷でもっと悲惨だったと思います。

沖縄での戦争も、広島での戦争も、ほんの数十年前に確かにあったことです。そしてまた戦争は今も世界のどこかで起こっています。戦争は過去のことではないのです。資料館の写真に写っている人たちは、もしかしたら私だったかもしれないし、あなただったかもしれないのです。戦争は過去のこと、他人事ではないということを決して忘れてはいけないと思います。

これから世界がどうなっていくのかは、私たちの手にかかっています。「私一人では何も変わらない。」

と思うかもしれません。それでも、一人一人が生きていることの大切さを感じ、国境や人種などの壁を乗り越えて理解しあうことができたら、確実に世界は変わります。平和を願う強い気持ちがあれば、だれでも世界を変えることができます。二度と同じ悲劇を起こさないためにも、一人一人がちゃんと戦争と向き合っていくことが大切なのではないでしょうか。